

# 学生発案型授業「Let's Cooking！地域の人と自炊力を鍛えよう！！」の成果と課題

## Achievements and Issues of the Student-Generated Course "Let's (Try) Cooking！ Training of Cooking One's Own Food with Local People"

和賀 崇  
Takashi WAGA

### 要旨

岡山大学では、「学生参画型教育改善」の一環として、学生発案型授業の創作に取り組んでいる。学生・教職員教育改善専門委員会が2013年度に創作した学生発案型授業の創作経緯ならびにその受講学生の感想等を基に、当該授業の成果と課題について、また学生発案型授業としての成果と課題について考察した。当該授業そのものとしては、学習目標としていた料理技術には概ね学生の達成実感が確認できたものの、他者とのコミュニケーション能力については課題が見受けられた。学生発案型授業としてみた場合、創作に関わる学生に授業観の変容を促す成果があるが、学生の関与が限定的になってしまう点、学生と担当教員との間に衝突が生じる場合があるなどの課題も見受けられる。

### キーワード

学生発案型授業、学生参画型教育改善、授業改善

### はじめに

岡山大学では、1991年より、学生がファカルティ・ディベロプメント（FD）活動に参画する「学生参画型教育改善」に取り組んでいる。近年、「学生FD」、「学生参画型FD」などとも称される活動である。

その中核をなす組織が学生・教職員教育改善専門委員会（以下、改善委員会と略記する）である。改善委員会は、教育開発センターのFD部門の一部をなす正式な委員会で、学生委員と教職員委員で形成される。年度によって人数は変動するが、大よそ学生委員30名、教職員委員15名程度で構成される。学生委員は、毎年度各学部から1～2名推薦される仕組みとなっており、学生委員の任期は2年、教職員委員は1年である。

改善委員会の活動は、学生交流、システム改善、授業改善という、3つのワーキング・グループ（WG）に分かれて展開されている。それぞれのWGの活動内容を概観すると、学生交流WGは「教育改善学生交流i\*See」を開催し、他大学の学生FD団体との交流を促進している。i\*Seeは2006年から毎年1回開催しており、2014年で10回を数える。システム改善WGは、勉学環境に関わる制度やシステムについて、学生目線の改善提案を行う。これまで、授業評価アンケート

ト、成績確認画面、シラバスなどの使い勝手向上のための改善提案をまとめ、そのうちのいくつかについては改善を実現してきた。授業改善 WG は、履修相談会の開催、学生発案型授業の創作を行う。履修相談会は、毎年 4 月に新入生に対し履修の方法等を上級生が説明する会で、新入生の 9 割程度が参加するものである。

このように、岡山大学の学生参画型教育改善の活動は多岐に渡るもので、全国的な展開を見せる「学生 FD」の取り組みにおいて代表的なものとして評されている（木野 2012a）。中でも、学生が授業の内容や方法を構想し、教員も選定する学生発案型の授業は全国的に見ても珍しいものである。

本稿は、改善委員会が創作し、2013 年度に学生発案型授業「Let's Cooking! 地域の人と自炊力を鍛えよう!!」（以下、Let's Cooking と略記する。なお、発案時の授業名は「生きる力」であったが、煩雑になるため、必要な箇所以外の授業名は 2014 年度の名称に統一する。また、Let's Cooking は正しい英語ではなく、本来は Let's Try Cooking などとされるべきであるが、シラバス記載の科目名に合わせて、このようにする）の創作経緯ならびにその受講学生の感想等を基に、当該授業の成果と課題について考察するとともに、限定的ではあるが学生発案型授業の成果と課題について考察したい。

なお、筆者は改善委員会の教員委員、副委員長として授業創作に関わり、授業そのものについては、1 年目は支援を行う教員として、2 年目は授業担当の教員として関与している。

### 学生発案型授業とは

学生発案型授業は、明確な定義のある用語ではない。岡山大学では、従前よりこの用語を使用しているが、その意味するところは、「改善委員会が企画、提案し、あるいはそれに関わり、教員と協力して開講する授業」という程度である。具体的に授業のどの部分を提案したから、あるいはどのように関わったから学生発案型だという線引きはない。

実際、表 1 のように 2014 年度までに 9 科目の学生発案型授業が開講された。いずれも教養教育科目である。しかし、創作の契機や手順は同一ではなく、例えば「知ってるつもり? コンビニ」は、第 4 回の教育改善学生交流 i\*See における授業創作コンテストで選ばれたものであるし、「ドラえもん科学」は岡山大学の学生から授業案を募集したものである（詳しくは、天野（2012）を参照されたい）。

ちなみに近年報告されている「学生参画型」の授業との違いについて整理しておこう。

代表的な取り組みとして、木野（2012b）は「双方向型授業」を掲げ、学生と双方向のやりとりをしつつ、学生が主体的に学ぶ授業を展開している。あるいは、長谷川（2012）は、「授業運営委員会」という組織を設定し、教員との協同で授業運営に当たる仕組みを実践している。京都文教大学の「京都文教入門」の取り組みのように、既存の授業に学生の意見を取り入れつつ改善を図る事例も存在する（梅村、2012）。

これらの取り組みは、学生が参画する授業改善という枠組みにおいては、学生発案型授業に近いものではある。しかし、学生発案型授業は、学生の学びたいテーマについて学生自身が発案すること、何もない状態から学生が授業の中核を考え提案することという特徴があり、全国的に見ても異色の取り組みであるといえよう。

表1 学生発案型授業一覧

科目名	開講年度
生きる力～料理等を通じて培うコミュカ～ (2014年度に「Let's Cooking！地域の人と自炊力を鍛えよう！！」に改称)	2013-
知らなきやばい、大人のマナー	2009-
This is Okayama Special	2008
This is Okayama Basic	2008
君は頭が良くなりたいか～発信力～ (2012年度に「みんなで極める発信力～伝える力をモノにできるか～」に改称)	2008-2012
知ってるつもり？コンビニ	2006-2008
ドラえものの科学	2005-2008
大学授業改善論	2004-2013
癒しの公園計画 (「公園を創る 庭園を楽しむ」に改称後、2014年度に「サービスマーケティング1」に改称)	2003-

(注) 終期が付されている科目は、現在開講されていない。

### 「Let's cooking」創作の経緯

授業改善WGの活動内容は、概ね先にみたとおりであるが、「Let's Cooking」の創作が着手された当時、特定の継続的な活動に取り組んではいなかった。そのため、新旧委員の交代時期にはどのような活動を行うかの検討を最初に行っていた。筆者の観察するところでは、授業創作のそもそもの契機は、教員委員からの提案である。具体的には「学生発案型授業が減ってきており、近年の創作もないので、取り組んでみてはどうか」という助言であった。念のため付言すると、改善委員会において教員もまた一委員であり、その立場から助言や意見を述べるものの、学生委員が拒否すれば実際の活動となることはない。

提案を受けて、学生委員はこれに賛成し、授業案の作成に取り掛かる。

授業改善WGメンバーで授業創作を進め、5か月の検討の結果、3案の授業案がまとまる。その3案とは「落語で身につける話術(仮)」、「大学生がホンネで語る～学生討論会～(仮)」、「現職に聞く～教員の声～(仮)」であった。

改善委員会の仕組みとして、WGの検討を実施、実行するためには、構成員全員で行う会議「全体会」の承認を得ねばならない。学生発案型授業の創作に当たっては、担当教員を募集する必要があり、その募集を行う前段階で全体会の承認を得ることが手順となっていた。

しかし、全体会では他の委員の意見により、いずれの案も承認されなかった。その理由は、WGメンバーのみの意見で作成された授業案は学生のニーズを捉えているといえない、というものであった。授業改善WGメンバーは、この意見を受け入れ、再検討に取り組むこととなる。

再検討するにあたって、授業改善WGメンバーが取り組んだのは、学生の意見を調査するアンケート調査の実施であった。アンケート用紙は、学生の学びたいと思う内容、教材、成績評価の

方法、授業の形式、授業の規模等を問う設問で構成されている。アンケートは、木曜日第2限に開講されている教養教育科目 33 科目の受講生を対象に行い、実施については担当教員にアンケート用紙の配布、回答の指示、回収を依頼した。2 週間ほどの実施期間を設定して回収し、回答数は 1614 となった。アンケートは、授業改善 WG メンバーで集計し、類似の回答をまとめるなどして、学生のニーズをキーワードとして抽出した。上位となったキーワードは、上位から「心理学」、「料理・食生活」、「マナー」、「コミュニケーション能力」であった。このうち、「心理学」にはすでに該当する科目があり、「マナー」についても学生発案型授業「知らなきやばい 大人のマナー」があった。それゆえ、それ以外のキーワード「料理・食生活」、「コミュニケーション能力」を組み合わせることで授業を創作することとなる。

再検討後、最初にまとめた授業案は料理を中心とするもの、科目名は「料理教室」であった。会議資料によれば、その内容は「一人暮らしをする上で大切な食事を自分で作るスキルを習得する」という、ほぼ全回に渡り料理のノウハウを学ぶというものである。この案は全体会へ途中経過報告を行った時点で、大学の講義として相応しくないと否定的な見解が示されたため、修正案を作成することとなる。

修正案では、地域住民との交流を強く意識し、岡山の文化を学ぶ内容も盛り込まれる。授業名についても、「生きる力」と改めた。これは、「受講生は大学生の食生活を考えるきっかけを得、地域社会で大切にされている伝統を体験し、地域で生活する力を身に付け」つつ、「授業の過程で、ボランティアの方とのコミュニケーションを重ねることで『コミュカ』（コミュニケーション能力）を培い」、「グループワークを主体とし、周囲と協力する態度や力を培う」という授業が目指す能力が、「今後の人生に必須の力」であると考えたことから命名された授業名である。それだけでは分かりにくいいため、副題に「料理等を通じて培うコミュカ」を付し、授業の目的と概要が分かりやすくなるよう工夫した。なお、「コミュカ」とはコミュニケーション能力の略であり、こういった学生になじみのある表現を活用するのも学生発案型の授業に見られる特徴である。

当該修正案は承認され、すぐに教員募集の手続きを行った。岡山大学に所属する全専任教員にメールにて公募を行い、4 名から回答を得る。夏季休業中の 2 週間ほどを使い、それらの教員一人一人について、WG メンバーが面談し、授業の説明、学生の希望を伝えるとともに、教員からは授業についての意見、助言を得た。全ての面談を終え、WG メンバーで検討し、一人の教員に依頼することとした。また、支援のための教員として、改善委員会の教員 1 名を当てることとした。

途中で別の授業案の検討も含まれてはいるが、この「Let's Cooking」の検討は約 2 年に渡るものである。正確な記録が残されていないが、歴代の学生発案型授業の中で最も長い時間をかけた授業であろう。検討開始時に 1 年生だった学生委員は、開講時には 4 年生になっていた。

表 2 「Let's Cooking」検討経緯

2011 年 1 月	検討開始
	(WG メンバーで授業案①を検討)
6 月	授業案①を全体会に提案→非承認
10 月	アンケートの実施
	(アンケートの集計と授業案②の作成)

2012年 4月	授業案②の提案→修正意見→授業案③
5月	授業案③の提案→承認
6月	教員公募開始
8月	教員面談
10月	担当教員決定
	(担当教員と授業について検討)
2013年 4月	授業開始

### 1年目の授業設計、開講と課題

担当教員が決定した後は、教員とWGメンバーとで授業の詳細について検討を続け、授業の実施に必要な京山公民館や津島学区栄養改善協議会へ協力依頼を行った。

授業の概要については、シラバス（表3）の通り、学生の希望がほぼ実現された。シラバスにおける「学習目標」、「授業計画」、「成績評価」などは、学生の希望がほぼそのまま反映されている。

教員側では、京山公民館及び津島学区栄養改善協議会メンバーとの日程調整や実習費用などについて、さらに詳細に検討した。大学側とも交渉を行い、京山公民館や津島学区栄養改善協議会の食材費などを大学の費用でまかなえるよう調整した。

表3 2013年度シラバス（抜粋）

授業科目名	"生きる力"～料理等を通じて培うコミュニカ～
授業の概要	料理等を通じて地域社会との関わりを学び，“生きる力”を身につける。
学習目標	学生一人一人が講義内で自分の役割を果たし、周りと協力することを学ぶ。かつ、地域社会で大切にされている伝統を体験し、コミュニカ（コミュニケーション能力）を養う。さらに，“大学生の食生活”を考えるきっかけを得る。
授業計画	第1回 ガイダンス 4/12（金）3限を予定 第2・3回 コミュニカ養成講座①（調理編）5/12（日） 第4・5回 コミュニカ養成講座②（調理編）5/26（日） 第6・7回 コミュニカ養成講座③（調理編）6/16（日） 第8・9回 コミュニカ養成講座④（伝統芸能編・座学）6/30（日） 第10・11回 コミュニカ養成講座⑤（調理編）7/6（土） 第12・13回 コミュニカ養成講座⑥（伝統芸能編・練習）7/13（土） 第14・15回 コミュニカ養成講座⑦（伝統芸能編・成果発表会）7/20（土）
受講要件	以下のことに同意できる学生のみ受講してください。 ●日曜日に開講される授業を含め、原則として毎回の授業に必ず参加できること。 ●実習の費用（おおよそ3000円）を負担できること。なお、実習の費用は初回のガイダンス時に集金します。
成績評価	出席・シャトルカード（30%）、受講態度（30%）、レポート（40%）

（注 記載するにあたり一部を削除するなど編集を加えている。）

京山公民館の調理室の定員の関係で、履修者の上限を 30 名としていたが、実際の履修登録者は 7 名であった。このうち 2 名は、授業改善 WG の学生委員である。

1 年目の課題としては、まず、想定以上に履修者が集まらなかった点があげられる。土日の集中講義の形態であること、履修に費用が必要であること、通常とは大きく異なる授業内容であり敬遠されたこと、授業名に訴求力が十分でなかったことなどいくつかの理由が考えられた。また、授業は土日に行っていたが、時間割上は教養教育科目に割り当てられている時間帯（金曜日第 3 限）に登録されていたため、教養教育科目の履修機会が 1 コマ分失われてしまうという点で学生から敬遠されたということも考えられる。

また、授業計画後半の「伝統芸能編」では、岡山大学の立地する津島地区に伝わる「八朔踊り」を学ぶ内容にしていたが、学生の欠席が目立つ結果となった。履修していた学生委員によれば、スケジュールが合わない学生が多かったとのことである。

前半の料理についても、2 コマ分（180 分）の時間を想定していたが、実際にはこの時間内には収まらず、大幅に時間超過してしまうこともあった。これは、授業時間に調理実習だけではなく、食材の買い出しやその指示、次回のメニューの検討などを行ったことも影響している。

## 2 年目の改善と授業設計

1 年目の上記のような課題を受けて、2 年目の授業設計にあたっては、昨年度履修した授業改善 WG メンバーから、次の改善点が提案された。なお、この過程は過去の学生発案型授業にはなかった過程と思われる。授業創作に関わったメンバーの熱意が高く、当該授業を履修したという条件が重なったため、可能となった。

- ① 授業名を「Let's Cooking! 地域の人と自炊力を鍛えよう!!」へ変更する。
- ② 8 月上旬に行う集中講義にする。
- ③ 八朔踊りは授業計画から外し、料理を中心とした授業にする。
- ④ 講義計画は、ガイダンス 1 コマ、料理が 3 コマ×3 回、学外実習が 5 コマとする。（注 学外実習については担当教員からまず提案があり、それを受けて WG メンバーが検討したものである。）
- ⑤ 授業内容が分かりやすく伝わるようにシラバスを書きかえる。
- ⑥ 実習の費用（3000 円）を可能であれば引き下げる。

担当教員を交えて検討し、その全てについて改善に取り組むこととした。授業内容は料理に集中し、授業名についてもそれに合うよう改めた。授業時間も見直し、従前 2 コマ（180 分）のところを 3 コマ（270 分）とした。実習の費用も 2000 円に引き下げた。学外実習については、岡山という立地、料理という授業テーマに沿って、塩業についての学習と塩作り体験を行うこととした。費用や時間、大学からの移動距離などの諸条件を検討する必要があったため、内容については教員のみで検討し、決定した。

なお、日程については京山公民館、津島学区栄養改善協議会と調整を行ったが、実現には至らず、前年度と同じ不定期の土日開講となった。しかし、実習部分について、前年度は 5 月から 7 月と 2 ヶ月にわたっていたところ、5 月中旬から 6 月中旬の 1 か月間に集中させることができた。

また、WG メンバーの改善提案にはなかったが、前年度の授業の様子を観察したところ、調理室で授業を行うには 30 名は多すぎると思われたため、履修者の上限は 20 名とすることとした。

加えて、時間割上も集中講義の区分にすることとし、学生の教養教育科目の履修を圧迫しないよう配慮するとともに、細々とした調整、手続き、準備の手間が生じることから、授業運営のやり方も見直し、担当教員を2名として分業する体制とした。

表4 2014年度シラバス（抜粋）

授業科目名	Let's Cooking！地域の人と自炊力を鍛えよう！！
授業の概要	地域の方々とともに料理をすることで、日常生活に必要な自炊力と地域とのかかわり方を身につける。初心者の方は基本から、ある程度料理ができる方は地域の人ならではの料理が学べます。昨年度は「岡山のばら寿司」などを作りました。
学習目標	料理を基礎から学び、一人暮らしでも健康的で楽しめる食事ができるような自炊力を養う。かつ、普段あまり関わりのなかった地域の方々と料理をすることで、日常生活でも地域の方々とのコミュニケーション出来るようにする。
授業計画	第1回【4月16日（水）5限】ガイダンス（一般教育棟A42教室） 第2・3・4回【5月18日（日）】調理実習① 第5・6・7回【5月25日（日）】調理実習② 第8～12回【6月1日（日）】学外実習（塩作り体験） 第13～15回【6月14日（土）】調理実習③
授業内容の前提となる知識	ありません。料理初心者でも受講可能です。
授業形態・使用機器	調理実習を行います。
成績評価	出席・シャトルカード（30%）、受講態度（30%）、レポート（40%）
備考／履修上の注意	また、以下のことに同意できる学生のみ受講してください。 ●ガイダンスを含め、原則として毎回の授業に必ず参加できること。 ●実習の費用(おおよそ2,000円)を負担できること。なお、実習の費用は初回のガイダンス時に集金します。

（注 記載するにあたり一部を削除するなど編集を加えている。平成25年度のシラバスと項目が異なるのは、シラバスの様式に変更があったためである。）

理由は定かではないが、初回のガイダンスに参加した学生は30名を越える事態となった。教員から授業の性格、毎回の出席が原則であること、費用が必要であることなど、調理室の定員があることなど説明を行い、事情を理解してもらった上で、10名程度には履修を見送ってもらった。結果、24名が履修することとなった。

授業は欠席者もほとんどなく、順調に展開された。1年目では履修人数の関係でグループに分けて実習できなかったが、2年目は学生5名程度、そこに津島学区栄養管理協議会のボランティア1名に加わえたグループをつくり、実習を行えた。授業時間や実習費用、授業後半の欠席など、前年度に課題となり改善を加えた点も支障は生じなかった。

## 「Let's Cooking」の成果と課題

2年目は期末レポートとして、学習目標（料理技術、他者とのコミュニケーション）についての自己評価をもとめた。その記述から学生発案型授業「Let's Cooking」の成果と課題を探ってみたい。

料理技術については、「(料理の)手順などが分かるようになった」、「材料の切り方など色々な技能」が体験できた、「どのくらいの(材料の)量を買えばよいかなどを考えながらすることができるようになった」、「食材の下ごしらえなどもおぼえることができた」、「めん作りのコツをつかめた気がします」など、料理の全般について、ある程度の達成感を得ていることが分かった。また、複数人分の料理を行うという体験から「効率よく料理をするということができるようになった」という自己評価も散見された。料理技術については、何かしらの成果があり、受講生もそれを実感しているようである。

他者とのコミュニケーションに関しては、「学部をこえた交流ができてよかった」、「殻に閉じこもってはいけないと思い、果敢に話しかけに行けたところが良かった」、「少しずつ円滑なコミュニケーションが取れるようになった」など、肯定的な評価が半数程度あったものの、「(役割分担が)あまり上手くきまらず、自分が何をしたらよいか分からなかった」、「仕事の分担をする時にうまく仕事の内容を理解されていない時があったので、人に仕事を頼むときにわかりやすく言うようにしようと思う」、「事務的な会話はできるが、積極的に自分から話しかけたり、雑談をしたりするのは苦手で上手くできていない」といった評価も半数程度を占めた。コミュニケーションに関する部分については、達成の実感が少ないようである。授業を観察した筆者も同様の感想を持っており、特に授業の序盤は、学生同士、学生と津島学区栄養管理協議会のメンバーとのコミュニケーションが少なく、用意すべきものが用意されていない、数量・分量がレシピと合っていない、学生が「棒立ち」になるといった場面も少なからずあった。授業終盤には、そういった場面はかなり減少したが、コミュニケーション不足の場面はなくなったわけではない。

全般的には、受講生の受講態度は熱心であり、授業で学んだ料理についても「家でもやってみよう」と、積極性をのぞかせている。授業を「楽しい」と感想を寄せているところから見て、概ね満足度も高いと推察される。学生発案型授業の目的である、学生のニーズに合った授業を提供することは、ある程度達成できたといえよう。

課題については2年目に幾分解消されたが、いくつかは残されたままである。例えば、料理についての指導を行うのは、津島学区栄養管理協議会の構成員であり、学生や教員との日程調整が難しい。ボランティアとして積極的かつ好意的な協力を得られているものの、授業の継続性という面では不安要素でもある。また、彼らの食材費については、大学の費用でまかなっているが、調理器具を借り受けるなど細かな支援を受けており、その提供される労力や費用に見合う対価が支払えている状況にもない。

また、学生の希望をより多く実現しようとした結果、教員の負担は少なくないものとなっている。学外の協力者との日程調整が必要であること、費用負担について手続き、作業が煩雑であることなど、他の授業では余り必要としない負担が生じてしまう。

最後に、改善委員会と発案した授業との関わりを焦点に、「Let's Cooking」が学生発案型授業としてどうであったかという面からも、その成果と課題について考察する。

まず、本授業の趣旨を鑑みれば、学生が学生発案型の授業だと認識していない点は、課題の1つである。個々の授業の展開には影響はしないが、学生発案の授業があり、学生の参画によって授業や教育が改善されるという、学生参画型教育改善の気運を高めていくことに貢献できていな



いことになる。

授業創作時の学生と教員の協働のあり方にも課題がある。学生の考える要点、必要事項や日程と教員の考えるそれらに乖離があることがあり、学生委員と緊密に連携がとれる環境にある教員であれば、その解消は比較的容易であるが、そうでない場合、衝突や葛藤を生んでしまう。改善委員会の教職員委員が適切に介入するなど、配慮が必要である。

また、開講後に学生の関与がなくなってしまう、年度を経るごとに教員にまかせきりになってしまう点も課題であるといえる。「Let's Cooking」では、発案した学生委員が履修するという状況になり、1年目の改善点を提案したが、これは偶発的な出来事であり、そのような仕組みがあるわけではない。学生のニーズに合わせるという点では、学生の継続的な関与を制度として取り入れるか、数年毎に授業を入れ替える制度とするか、何らかの手立てを考えることも必要である。

成果としては、授業を創ることにより、学生の授業観の変容を促すということがある。尾木・和賀（2013）によれば、授業創作に関わった学生は、授業創作について「授業の準備は思った以上に大変」と述べ、授業を成立させる労力について、認識を改めたことがわかる。加えて、『『こんな授業やって』だけではダメ！学生・教職員で話し合いながら創ろう！』と学生と教員との協働の重要性に言及している。これは、学生発案といっても、学生の希望をまとめただけでは、授業として成立しないことを経験したからこそその発言であろう。授業を成立させるには、教材や教育方法、評価の方法、教室・教具などの準備など、授業に関わる多くの要素に気を配る必要があり、それらについて学生は日常的には意識していない。授業創作に関わることによって、これら授業を構成する要素への認識が促され、教育改善への気づきを得ることができる。この気づきは、現実的で、妥当な教育改善の提案を学生が行うための素地ともいえる。しかし残念ながら、これらの成果は授業創作に関わる、改善委員会の数人の学生しか享受できていない。学生参画型教育改善を展開させていくためには、是非多くの学生にこの成果を提供したいところである。

#### 参考文献等

- ・ 天野憲樹（2012）「第5章 学生・教職員教育改善専門委員会 SweetTFooD」、pp.105-126、『大学を変える、学生が変わる』木野茂編、ナカニシヤ出版、2012年。
- ・ 梅村修（2012）「有志・草の根『FSDproject』」pp.195-226、『大学を変える、学生が変わる』木野茂編、ナカニシヤ出版、2012年。
- ・ 岡山大学教養教育シラバス（平成25年度）  
（<http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/cgi-bin/cbdb/db.cgi?page=DBRecord&did=1448&vid=34&rid=9134&text=%98%61%89%EA&Head=&hid=&sid=m&rev=0&ssid=2-1488-29825-g241>）
- ・ 岡山大学教養教育シラバス（平成26年度）  
（<http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/cgi-bin/cbdb/db.cgi?page=DBRecord&did=1659&vid=34&rid=9168&text=%98%61%89%EA&Head=&hid=&sid=m&rev=0&ssid=2-99-29027-g241>）
- ・ 岡山大学定例記者発表資料「学生企画の『生きる力』を学ぶ授業がスタート」（2013年5月23日）（[http://www.okayama-u.ac.jp/up\\_load\\_files/soumu-pdf/press25/press-0523-6.pdf](http://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/soumu-pdf/press25/press-0523-6.pdf)）
- ・ 尾木篤志、和賀崇（2014）「岡山大学における学生発案型授業」、学生FDサミット2014春「学生FD戦略論」発表資料
- ・ 学生・教職員教育改善専門委員会「学生・教職員教育改善専門委員会」配付資料（2011年5月、2011年9月、2011年12月、2012年4月、2012年5月、2013年5月）

- ・ 木野茂 (2012a) 「学生 FD への誘い」 pp.7-8、『大学を変える、学生が変わる』木野茂編、ナカニシヤ出版、2012 年。
- ・ 木野茂 (2012b) 「学生とともに作る授業」 pp.27-48、『大学を変える、学生が変わる』木野茂編、ナカニシヤ出版、2012 年。
- ・ 長谷川伸 (2012) 「『授業運営委員会』のススメ」 pp.117-129、『学生・職員と創る大学教育』清水亮・橋本勝編、ナカニシヤ出版、2012 年。